

『私を創ってくれた3つの作品』

スペースデザイン部会員 野口 真理

【作品 1】



「曲」

第71回新制作展(2007年)

w55cm h50~65cm d25cm(平均サイズ/1個)

素材： 陶土、釉薬、粉漆、金属箔、カシュー

技法： ひも作り

新制作展に都美術館で開催されていたころから出品していて国立新美術館へ移動した年に新作家賞をいただいた作品です。その頃はいろいろな展示の場が人のご縁で広がっていました。個展をかけさせていただく中で出会った表現者のおひとりで、著作に感銘をうけステートメントを作りました。一部掲載します。音楽から建造物まで織り込まれた本を複数出版されていたことを思い出します。出身地の新聞社である北海道新聞の文芸欄「秋の公募展を見て」で以下のコメントをいただいたことも強い印象です。武田 厚氏(美術評論家)「ユニークな作品であった。素材や技法、あるいは空間認識までもが複合伴用されていて興味深い。」私がふわっと考えていた想念が他の方へも伝わった気がしました。

曲

「曲る」ということに心惹かれます。

「生活空間」家の構造はさまざまな用により分別され、それぞれが求める空間を「曲り屋」という表現で適切に対応されています。

用に応じて閉ざされたり開かれたりする空間は、時に応じて臨機応変に対応します。曲りの場は、人それぞれの心理に対応し、融合するものであるのかもしれません。

曲り屋の存在が場に生き場を作るのは人だけではありません。人に限らず、植物、動物、さらに自然に存在する土、石、水、それらの集合として現われる山、川、池、岩壁、など等自然のめぐみによって生かされ共にあるということを思いだされる気がします。どこかエッセンスを造形することができればと考えています。

また個人的空間に限らず、町並の現れ方、道路のあり方、木の枝の育ち方、川の流れの紆余曲折、まるで変形を楽しんでいるかの如くです。

自然の美意識です。美意識とはそれら現れた形にさそわれて、芽生えると考えます。変形は造形の原点ではないでしょうか。陶素材による「曲り屋」の提案です。

(参考文献：「曲ることから生れる新空間」大野忠男)

Concept 'Being bent'

I am attracted by 'being bent' .

A house, a space for living, is divided into spaces by use, and each space is appropriately named 'a bent space' . A space, which is flexible to close or open by the usage, acts according to circumstances. A bent space might deal with mentality of each human being to blend.

It is not human being only that gives life to a bent space. It reminds me that we are given life by nature' s bless and live with it, which comes from plants, animals, soil, stone, water and mountains, rivers, ponds, rocky walls as the collective entity. I wish I could give a form to its essence. Moreover, it seems that it is not only a personal space that enjoys the deformation, but so do the way a town is formed, the way a road is paved, the way a twig is grown on a tree, and twists and turns of the river flow. It is nature' s sense of beauty. I think that a sense of beauty is born and guided by the form where it is found.

Deformation is the original form of creation, isn' t it? This is the proposal of a bent space by clay.

(Reference: 'A new space born by being bent' by Tadao Ohno)

【作品 2】



「まるくひそむもの」

第 79 回新制作展 (2015 年)

w40 ~ 55cm h40 ~ 60cm d20 ~ 55cm

素材：陶土、釉薬、粉漆、金属箔、カシュー

技法：ひも作り

紐作りで本体にあたかも穴が開いた様に見える造形が、制作していて楽しく幾つも制作していた年でした。イメージは空間そのものが醸し出す気配を形ににするのが夢でひっそり片隅に佇む見えないものを見たくてという気持ちです。

【作品3】



「つちのレン」

第83回新制作展(2019年)

w200cm h40cm d300cm

素材：陶土、釉薬、粉漆、金属箔、ステンレスボール、カシュー

技法：ひも作り、たたら作り

植物は土から水分をとり、肥沃な土壌から生まれ、育ちます。陶土は焼成することで形となり残ります。植物をイメージして造形しました。鑑賞者へ作品に触れて座っていただき蓮の水面を想像していただく提案をしました。参加型で鑑賞者がおられて成り立つ作品です。

野口 真理 プロフィール



(椅子オブジェ・撮影：金原京子氏)

1957年北海道旭川市生まれ

1977年女子美術短期大学造形科卒

日産自動車株式会社造形部、東洋ガラス株式会社企画課でデザインの仕事に従事。

1997年学士取得。

2002年～ 新制作展(2007年、2016年 新作家賞)

2004年、2005年 上野の森美術館大賞展出品(上野の森美術館)

2007年 新春公開映画「幸福な食卓」(松竹・原作瀬尾まいこ)作品協力

2005年～ CAFネビュラ展(埼玉県立近代美術館)

2005～2018年 チェリモヤ展(練馬区立美術館)

2007年～2011年 日本建築美術工芸協会主催「卯月展」(建築会館)

2009年 飯田橋ラムラエントランスホール「写心と陶」展

2011年 国際陶芸教育交流展(東京芸術大学大学美術館陳列館)

病院とアート展(さいたま市民医療センター内)

2011年～2017年小島孝子と女子美術大学同窓会展

【2015「どうぶつ日和」、2016「青・あお・蒼」2017「生きる」】(北アルプス展望美術館
企画/安曇野)

2011年～2021年 four exhibition 天王洲セントラルタワーアートホール展(東京都)

2015年～2019年 日本建築美術工芸協会主催「街なかミュゼ」出展(船橋市他)

2016年芸術在線 国際女流画家協会世界巡回展東京(東京中国文化センター)/北京

2016年～ 日本建築美術工芸協会主催「BOX展」(建築会館)

2017年 新制作 北海道ゆかりの作家たち展(本郷新記念札幌彫刻美術館)

[個展]書肆啓祐堂(高輪) ギャラリーカンディード、画廊るたん(銀座) Bギャラリー(西池袋) 三番町ギャラリー(川越) エルポエタ、風画(さいたま市) 住まいの間～夏のしつらい at 可喜庵(主催：鈴木工務店 企画：MINFAPLAN)

2008年 OAG 主催ドイツ文化会館ロビー展(OAGハウス東京)

2010年(伝統手摺木版高橋工房企画)高橋工房ギャラリー蒼 他

個展、グループ展等で活動

収蔵 さいたま市民医療センター他

現在埼玉県立の芸術系高校で美術科非常勤講師、さいたま市のコミュニティー施設で陶芸指導。